

# ハイデガー『存在と時間』における 対話的な場の究明：「身体」・「語り」・「倫理」の統一的解釈

著者	?屋敷 直広
著者別名	TAKAYASHIKI Naohiro
その他のタイトル	Inquiry into 'Locus for Dialogue' in Heidegger's Being and Time : Unified Interpretation of Body, Discourse, and Ethic.
発行年	2020-03-24
学位授与番号	32675甲第469号
学位授与年月日	2020-03-24
学位名	博士(哲学)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00023023">http://doi.org/10.15002/00023023</a>

博士学位論文  
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	高屋敷 直広
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	第 712 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 講師 君嶋 泰明 副査 教授 笠原 賢介 副査 名誉教授 牧野 英二

ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉の究明  
——「身体」・「語り」・「倫理」の統一的解釈

はじめに

高屋敷直広氏提出の学位請求論文「ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉の究明——「身体」・「語り」・「倫理」の統一的解釈」（以下「本論」）は、20 世紀ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』（1927）に由来向けられてきた、同書には「他者」が不在であるとの批判にたいし、同書を独自の視点から擁護することを目指したものである。以下、本論の構成、概要、各章の内容を順に記した後、本論の評価について述べる。

1. 本論の構成

序論

- 第 1 節 本研究の目的
- 第 2 節 先行研究の現状と課題
- 第 3 節 本研究の考察方法
- 第 4 節 本研究の構成

第 1 章 存在了解の遂行の〈場〉——〈対話的な場〉の究明に向けて

- 第 1 節 「時間」への問いから〈場〉への問いへ
- 第 2 節 ハイデガー時間論の解釈史——時節性の未完と自然の関係を手掛かりに
- 第 3 節 『存在と時間』における自然概念の読解——純然たる眼前存在性への示唆
- 第 4 節 『存在と時間』の時間論がもつ限界の検討——ドレイファス説を通じて
- 第 5 節 自然を誤解する「自然時間」——ドレイファス説の制限
- 第 6 節 存在了解の遂行の〈場〉——自然における被投的な「身体」に定位して
- 第 7 節 〈対話的な場〉の究明へ

第 2 章 実存論的な空間性を可能にする〈場〉——現存在の「身体」の究明

- 第 1 節 『存在と時間』における現存在の「身体」への問い

- 第2節 ハイデガーの身体問題をめぐる新たな戦場——「身体・霊魂・精神」の破壊
- 第3節 「身体」を〈場〉として解釈する視点——セルボーン説を手掛かりに
- 第4節 実存論的な空間性の根源性——アルワイス説を手掛かりに
- 第5節 「空間を許容すること」に対する「身体」の関係
- 第6節 「方向付け」の根拠に対するハイデガーのカント批判
- 第7節 実存論的な空間性を可能にする〈場〉としての「身体」
- 第3章 態度としての〈場〉——「身体」と「語り」の連関の究明
  - 第1節 「身体」と「語り」の連関への問い
  - 第2節 「語り」をめぐるハイデガー身体論の解釈史——「態度」の解釈へ向けて
  - 第3節 「身体」と「語り」の日常的な連関の提示——ヴァルデンフェルス説を通じて
  - 第4節 「身体」と「語り」の連関の存在論的根拠——ヴァルデンフェルス説の制限
  - 第5節 思索の態度——バウアー説を手掛かりに
  - 第6節 態度の固有な空間性としての「場」——バウアー説の検討
  - 第7節 『存在と時間』における態度としての〈場〉——「身体」と「語り」の存在論的な連関
- 第4章 現事実的で異質な他者と出会う〈場〉——「身体」に基づく共存在の究明
  - 第1節 現事実的で異質な他者への問い
  - 第2節 共存在の解釈史——事実性および「身体」を手掛かりに
  - 第3節 共存在の解釈における被投性の重視——クリッチリー説を通じて
  - 第4節 「根源的な非本来性」から〈現事実性〉へ——クリッチリー説の制限
  - 第5節 「身体」と共存在——ミカルスキー説を手掛かりに
  - 第6節 現事実的な共存在——ミカルスキー説の検討
  - 第7節 現事実的で異質な他者と出会う〈場〉——「身体」に基づく共存在
- 第5章 「語り」の遂行としての〈対話〉——『存在と時間』における「言うこと」と「名付けること」の究明
  - 第1節 「語り」の遂行への問い——おしゃべりとの対決としての『存在と時間』
  - 第2節 ハイデガー言語論の解釈史における「言うこと」と「名付けること」
  - 第3節 ギリシア哲学からの影響——「オノマ」と「レーマ」の解釈を手掛かりに
  - 第4節 『存在と時間』における「名付けること」の用法——実存囁に定位して
  - 第5節 『存在と時間』における「言うこと」の用法——「名付けること」との連関をめぐって
  - 第6節 真理に即した「言うこと」の新たな意義と「聞くこと」
  - 第7節 「語り」の遂行としての〈対話〉——現存在と存在の呼応関係
- 第6章 『存在と時間』における〈対話的な場〉——他者との〈対話〉という「倫理」の究明
  - 第1節 「倫理」への問い——「語り」の反復に定位して
  - 第2節 根源的倫理の解釈史——『存在と時間』における「倫理」をめぐって

第3節 『存在と時間』における存在の近さと言葉——ケッテリング説を手掛かりに

第4節 「語りとしてのロゴス」と「現」の開示性

第5節 「言うこと」と「名付けること」に基づく「倫理」——存在との〈対話〉

第6節 現存在と共現存在の「倫理」——他者との〈対話〉

第7節 『存在と時間』における〈対話的な場〉

結論

## 2. 本論の概要

『存在と時間』のハイデガーによると、同書で「現存在」と呼ばれるわれわれ一人ひとりのあり方の根本的な特徴は、それが明示的にせよ暗黙裡にせよ「本来性」なあり方か「非本来性」なあり方かという二者択一を迫られている点にある。非本来性なあり方、すなわち非本来性とは、私が私自身としてというよりは、むしろ同質的な「世人」の一員としてふるまうことになるあり方を指す。これにたいして本来性なあり方、すなわち本来性とは、私が世人とのつながりを断ち、あくまで自分自身として行為することになるあり方を指す。ただしこの本来性において私は、最終的には、自分の属する共同体や民族の運命を受け入れるというかたちで、非本来性とは別の意味での同質性へと導かれていくことになると思われる。

このように、『存在と時間』の現存在においては、世人あるいは運命を共にする者たちという、一種の同質性にのみ着目した「他者」とのかかわり方しか考えられていないように見える。いいかえると、同書の現存在には、そもそも自分の理解の及ばない異質性をもった他者と、その異質性から目を背けることなくかかわる可能性が、まったく与えられていないように見えるのである。同書には従来このような批判が寄せられてきた。

本論はこのような批判にたいして、同書を擁護することを試みる。具体的には、本論は、同書の現存在には、そうした本来性と非本来性いずれの同質性にも還元されることなく他者とかかわりうる可能性が秘められていると主張するのである。その主旨は次のように要約されうる。

まず、そもそも、私と他者が互いに異なる現存在として出会うためには、両者はあらかじめ「身体」を通じてそれぞれ自分自身へと個別化されている必要がある。そのさい身体は、両者の固有性、ひいては互いにとっての異質性を形づくる主たる要因となっているだろう。これはハイデガーが、『存在と時間』公刊の翌年の講義『論理学の形而上学的な始元諸根拠』で現存在の「被投的分散」と名づけた事態にほかならない。この被投的分散は、各自にとってはそれとして受け入れるほかない事実であり、これにより、各自には、何を行うにもそこに拠って立つほかない一種の「場」が与えられることになる。身体は、このような「場」としての性格をもつのである。

他方、この身体を場として私が何かを語るとき、その「語り」は、私の固有性を何ほどかあらわにするはずである。したがって、各自がそれぞれの身体を場とするかたちで互いに語り合うことは、互いの差異を理解し合い、場合によっては互いのあり方の善悪をも問題にするような「倫理」の可能性を開くだろう。そのような他者とかかわり方こそが、『存在と時間』の現存在に秘められた、本来性と非本来性いずれの同質性にも

回収されないような可能性である。

本論は、このように身体、語り、倫理の統一として理解される場を〈対話的な場〉と呼び、これを、同書のハイデガーが敢えて論究しなかったが、そうすることも十分にできたはずの考えとして明らかにしようとする。すなわち本論はこの考えを、あくまで同書の論述から導き出そうとするのである。本論が「ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉の究明——「身体」・「語り」・「倫理」の統一的解釈」と題されるゆえんである。

### 3. 各章の内容

第1章では、『存在と時間』では十分に論じられなかった「自然」の位置づけをめぐり、ドレイファスの解釈が検討され、本論独自の解釈が提示される。本論によると、自然はドレイファスが主張したような「継起」としての「自然時間」のうちにあるものではない。それはむしろ、そういった理解すらも拒む、たんに「現前」しているものとしか呼べないものなのである。本論はこのように論じ、この意味での自然のうちに上述した「場」としての身体を位置づけている。

第2章では、『存在と時間』における身体についてのきわめて乏しい言及を手掛かりに、同書のありうべき「身体」観の再構成が試みられる。まず、セルボーンの「技能性の体系」としての「場所 (locus)」という見解が引き合いに出されるが、これはハイデガーの記述に照らして不十分だとされる。そして、ハイデガーにおいては「空間性」がきわめて根源的なものとして位置づけられていることが確認され、この空間性は総じて、現存在の「空間を許容する (einräumen)」という働きに基づいているとの解釈が提示される。そのうえで本論は、フニの解釈を参照しつつ、ハイデガーに従うなら、身体はこの空間を許容する働きが生ずる「場」として理解されるべきだと主張する。この解釈は以降一貫して保持されていくことになる。

第3章では、ヴァルデンフェルスに依拠しながら、一般に語りは身体を「場」として行われ、さらにまたあらゆる身体の挙動は（言葉を発することはなくとも）一種の語りの遂行として理解されうるという見地が固められる。そのうえで、このように語りと不可分なものとしての身体が、パウアーに倣ってあらためて「態度 (Gebärde)」と名付けられる。ただし、このパウアーの身体理解は、本論第2章で確立された空間を許容する働きのある場としての身体という視点が欠落しているとして批判されることになる。

第4章では、まず、そもそも非本来性においては、同質的な「世人」としてではなく、その異質性を尊重するかたちでの他者とのかかわりが可能であるとするクリッチリーの解釈が引き合いに出され、その不十分さが指摘される。そのうえで、ミカルスキーの解釈が参照され、ハイデガーが『存在と時間』公刊の翌年の講義で論及した「被投的分散」、すなわち身体を通じた現存在の個別化を考慮に入れることによりはじめて、異質な他者とのかかわりがいかにして可能かは理解されようとする。ただしこのミカルスキーの身体理解にも第3章でパウアーに向けられたのと同じ批判が向けられ、この被投的分散における身体は、あくまで空間を許容する働きのある場として理解されねばならないことが強調される。

第5章では、『存在と時間』における「名付ける (nennen)」や「言う (sagen)」の

いくつかの用法の分析を通じて、同書におけるハイデガーの語りが、「存在」からの呼びかけに聞き入り、これに応答するというかたちで、事柄にふさわしい名前をつけ、その名付けられたものの内実を「言う」ことを通じて明らかにしていく努力として理解されることが論じられる。

第6章では、こうした「聞き、名付け、言う」という語りの実践自体が後期思想でいうところの「根源的倫理」にほかならないことが、ケッテリングの解釈を活用しつつ確認される。そして、こうした「存在」との対話が、身体を場とするかたちで成立する異質な他者との対話とその倫理性を、一段深いレベルで支えているとされる。ここに至り、〈対話的な場〉は次の三層からなることが明らかにされる。まず、世人同士による、互いの固有性、異質性が問題とならないような対話が行われる第一の層。次に、この第一の層に抗うかたちで、異質な他者との対話が遂行される第二の層。そして、第二の層での対話の倫理性を支える「存在との対話」が位置づけられる第三の層である。

そのうえで本論は、このような〈対話的な場〉、とりわけその第二の層における他者とのかかわりは、ハイデガーは明示的には語っていないとしても、『存在と時間』の現存在に認められてしかるべき可能性であると結論づけるのである。

#### 4. 本論の評価

本論は、従来『存在と時間』に向けられてきた、同書には「他者」が不在であるとの批判にたいして、上述のような〈対話的な場〉という考えを同書から導き出すことで応答しようとする、きわめて意欲的な論考である。本論が収めている独創的な成果のうち、特筆すべきものとしては次の五点を挙げることができる。

第一に、本論がその統一的解釈を試みている身体、語り、倫理というトピックは、従来のハイデガー研究においては、その重要性は認められつつも個別に扱われることの多かったテーマである。これにたいして本論は、これらのテーマの内的な結びつきに光を当て、その統一的な意義を明らかにすることにより、独自の貢献を果たしている。

第二に、これらの三つの主題のうち「身体」は、『存在と時間』でわずかに言及されているにすぎない、扱いの難しい、敬遠されがちなテーマである。本論はその解釈に敢えて挑み、関連する国内外の文献を調べ上げ、自説との一致点と相違点を明らかにしながらこのテーマに含まれる論点を洗い出し、それぞれにたいして独自の見解を打ち出している。本論はこの議論のために、実に第1章から第4章を費やしている。

第三に、そうした本論の創見のなかでもとりわけ重要だと思われるのは、『存在と時間』の躓きの石として知られる「自然」の問題や、それと関連づけられることの多い「被投的分散」をめぐる議論のうちに、明確に「身体」を位置づけている点である。本論はこのことにより、同書においてどちらかというと周縁に位置づけられている「空間性」をめぐる議論、とりわけ現存在による「空間を許容する働き」にたいして、本来与えられてしかるべき文脈を与えることに成功している。この身体を介した「自然」との接続は、従来研究者を悩ませてきた同書における「空間性」の位置づけにかんして、貴重な示唆を与えるものとなっている。

第四に、本論は第5章で、ハイデガーが「存在との対話」と呼ぶ謎めいた事態の内実を、『存在と時間』の現存在の分析を具体例としながら、「名付けること」と「言うこと」

として明らかにしている。この議論は説得的であり、ともすると神秘化されがちな「存在との対話」なるものに、理解可能な内実を与えることに成功している。

第五に、本論は第 6 章で、この存在との対話が、異質な他者との対話や場合によっては生じうる倫理的な問題への対処を可能ならしめているとの見解を提出している。ハイデガーは、存在との対話を「根源的倫理」として特徴づけているが、従来、それが通俗的な意味での倫理にたいしてどのような含意をもつのかは十分に明らかにされてこなかった。本論はこの点にかんしても、今後の研究の導きの糸となりうるような卓見を提示している。

とはいえ、本論にも瑕疵がないわけではない。

第一に、いま述べた存在との対話と他者との対話の関係にかんしては、今後なされるべき研究の方向性を明確に打ち出してはいるものの、〈対話的な場〉の重層的な構造の説明としては物足りないものになってしまっている。この点については、本論が掲げている目的からすれば、より委曲を尽くした説明がなされるべきであった。

第二に、本論は、『存在と時間』で明示的には語られていない考えを同書から導出しようとするものであり、結果として、一步間違えば牽強附会と受け取られかねないような主張を行うことになっている。それだけに、本論は自説の論証に細心の注意を払うべきであったが、この点は必ずしも十分に自覚されているようには見えない。とくに、第 2 章で打ち出される「空間を許容する働きとしての身体」という考えは、後続する議論で先行研究を批判するさいの論拠として用いられていくものであるだけに、そのハイデガー解釈としての妥当性についてはより一層丁寧な論証がなされるべきであった。

第三に、本論の方法論にも疑問の余地がある。本論は基本的に『存在と時間』の内在的研究であることを標榜しているが、もしそうであるなら、ハイデガーが明示的には語らなかったことの再構成だけでなく、なぜ彼がそれを語らなかったのかを彼に寄り添うかたちで明らかにすることにも注力すべきであっただろう。本論は必ずしもそのことを十分に行っているとはいえない。

第四に、本論は、非本来性とは異なるレベルでの〈対話的な場〉を成り立たせるいわゆる「共現存在」のあり方がどのようなものなのか、さらに立ち入って論じるべきであった。たとえば、「空間を許容する働き」が〈対話的な場〉の成立にどのように寄与しているのか、という点についてより踏み込んだ説明がなされれば、本論の考える語りや対話の意味がより明確になり、本論の狙いがいっそう説得的になったであろう。

とはいえ、以上の点は本論の価値を損なうものではなく、また筆者自身の精進により、近い将来克服されることが十分に期待できるものである。

## 5. 口述試験の結果

本学学位規則第 19 条により、口述試験を 2019 年 12 月 14 日に公開の場で行った。高屋敷氏からは論文内容の適切な説明が行われ、審査小委員会ならびに来場者からの質問にたいしても的確な回答がなされた。その結果、審査小委員会は合格と判断した。

## 6. 結論

以上、審査したところにより、審査小委員会は、高屋敷直広氏提出の学位請求論文

「ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉の究明——「身体」・「語り」・「倫理」の統一的解釈」を上記のように評価し、高屋敷氏が博士（哲学）の学位を授与されるに十分な資格を有するとの結論に達した。